

天安工業大学との国際交流

堀内征治* 松岡保正** 中澤克昭*** 貴志武一****

International Goodwill Exchange Program with Chonan National Technical College

Seiji HORIUCHI, Yasumasa MATSUOKA, Katsuaki NAKAZAWA and Takekazu KISHI

キーワード：国際交流，韓国，天安工業大学，長野工業高等専門学校

1. はじめに

長野工業高等専門学校（以下「本校」）と韓国の天安工業大学（1999年に天安工業専門大学から天安工業大学に改称）は、1996（平成8）年に学術交流に関する協定書を締結し、以来相互の訪問を含めた国際的な交流を行っている¹⁾。

今年度（2001年度）は本校からの訪韓が計画され、7月末日から8月にかけて、第4回目の交流事業が実施された。ここでは、この訪韓にあたっての準備、交流事業の概要および成果について報告する。

2. 第4回交流事業の実現の経緯

本校と天安工業大学の第1回目の交流は協定締結の年に実施された。この年は天安工業大学から本校への訪問が実現し、本校および黒姫山荘を中心にして交流活動が営まれた。その翌年（1997年）は、本校から20名の訪韓団を構成し、天安工業大学を訪れて第2回目の学術交流会が行われた（これらについては参考文献1に詳しい）。

その後、両国とも経済的不況などが影響して、毎年の交流を継続することはできなかった。そのような状況下で、1999年に天安工業大学から本校への来訪がなされ、学生会役員を中心としたメンバーの対応で、交流事業の成果が得られた。2000年3月には、本校のプログラミングコンテスト最優秀賞受賞チーム（5年生4名、4年生1名）に与えられた韓国研修旅行の中で天安工業大学を訪問し、受賞作品の紹介を通して交流を深めた。

しかし、正式な学術交流事業は実施できず、先送りの状況になっていた。

2000年度の第11回運営会議（当時は運営委員会）では、2001年度の訪韓による第4回交流事業の実施を承認した。以降相手校との折衝を続け、2001年4月の運営会議において夏休み期間を利用した訪韓の骨子を決定した。訪問日程の概略を表1に、訪問団の構成員を表2に示す。なお、訪問団の学生については、学生会役員を除いて各学科2名を公募した。また、教職員は当初3名の計画であったが、次章以降に述べる両国間の情勢等を勘案して、本校非常勤講師（ハングル担当）を訪問団側の通訳として依頼し、同行いただくこととした。

訪韓計画は天安工業大学の黄課長（学事運営担当）との折衝を通して、着実に細部が固められた。しかし、7月にはいり、次章に述べるいわゆる教科書間

表1. 第4回交流事業の日程概要

期 日	日 程
7月30日(月)	長野駅発(7:02) 成田空港発(12:55) ソウル仁川空港着 (15:20) 天安着(18:00) 歓迎夕食会
7月31日(火)	記念撮影 歓迎式・交流会 大学見学 韓国歴史文化研修
8月1日(水)	韓国歴史施設等見学
8月2日(木)	仁川空港発(11:20) 成田空港着(13:35) 長野駅着(18:27)

* 電子情報工学科教授

** 環境都市工学科教授

*** 一般科助教授

**** 学生課長

原稿受付 2001年9月28日

題や、首相の靖国神社公式参拝問題が両国間に強い緊張感をもたらし、訪韓計画の是非もささやかれるようになった。しかし、最終的には天安工業大学側からの寛大な配慮にも勇気づけられ、交流事業を予定通り実施することを決断し、ストレスと不安の中での遂行となった。

表2 第4回交流事業訪問団名簿

区分	氏名	所属
教職員 (4名)	堀内 征治	電子情報工学科・教務主事・団長
	松岡 保正	環境都市工学科
	貴志 武一	学生課
	渋谷 高子	一般科非常勤講師(通訳)
学生 (15名)	月岡 洋子	環境都市工学科5年・学生会長
	小林 伯大	電気工学科4年・副会長
	福沢 芳恵	環境都市工学科4年・学友誌委員長
	小宮山弘子	環境都市工学科5年・工嶺祭委員長
	岩田 陽介	環境都市工学科4年・同副委員長
	下島 裕二	機械工学科5年
	石橋 和海	機械工学科4年
	岩下 拓也	電気工学科5年
	胡桃沢昌希	電気工学科4年
	大塚 直人	電子制御工学科5年
	住澤香穂理	電子制御工学科3年
	小田島静香	電子情報工学科3年
	森田あゆ美	電子情報工学科3年
	藤澤 義人	環境都市工学科4年
	斎藤 郁恵	環境都市工学科3年

(事前学習指導：中澤克昭(一般科))

3. 交流時期における両国情勢と事前学習

3-1 交流時期における両国間の情勢

日本と韓国は「戦後、最も良好な関係」といわれる状態で20世紀最後の年を送ろうとしていた。1998年に親日派の金大中氏が韓国大統領に就任したことや、2002年に両国がサッカーのワールドカップを共催することなど、さまざまな好条件も重なり、両国の友好関係は飛躍的に発展し、韓国における日本文化の解禁も急速に進みつつあったのである。

しかし、2001年、日本の歴史教科書をめぐむ問題により、両国の関係は急速に緊張し、韓国政府は、日本文化解禁政策の中断や、さまざまなレベルの交流事業の見直しを表明した。実際、長野県内の学校でも交流事業の中止や延期があいついだ。

今回の交流事業を、より有意義なものにするため、当初から計画されていた事前学習会は、こうした情

勢の変化により、その重要性がさらに高まった。本校では3学年までに「世界史」、「日本史」、「政治経済」および「倫理」を必修としているので、基本的な知識は習得している。そこで、両国間の情勢の変化をふまえ、事前学習の内容は、つぎの三つを柱とした。

- ・現段階での両国間の情勢、特に、いわゆる「教科書問題」について認識を深める。

- ・日韓両国の近現代史を再確認し、主要な論点(問題点)を知る。

- ・今後の両国の友好関係を発展させるためにも、近代以前の交流の歴史を知る。

以下に、事前学習の内容について報告する。

3-2 いわゆる「教科書問題」の概要

(1) 「新しい歴史教科書をつくる会」の活動

まず、問題となっている「新しい歴史教科書をつくる会」の概要を、その主張と活動の経過にしばって、つぎのように説明した。

その主張は、①今の歴史教育は「自虐的」であるから、その「自虐史観」を克服し、②日本人の誇りをとりもどせるような「物語」すなわち教科書をつくる、というもの。これまでの経過は、①1996年12月、「新しい歴史教科書をつくる会」創立。②1997年1月、文部省へ従軍慰安婦記述の削除を要求。③1999年6月、同会長長野支部設立。④同年10月、パイロット版『国民の歴史』発刊。⑤2000年4月、歴史(および公民)の申請本(白表紙本)が完成し、検定申請。

(2) 学習指導要領の改訂

1998年12月に、学習指導要領の大幅な改訂が告示されたことと、「教科書問題」の関連についても説明した。改訂では、いわゆる「ゆとり」が重視され、歴史についても内容は大幅に削除され、特に世界史については激減したこと。「新しい歴史教科書」は、この改訂を狙ってつくられたことなどを指摘した。

(3) 「新しい歴史教科書」の概要把握

訪問団メンバーの理解を深めるため、『新しい歴史教科書』(扶桑社)の市販本を用意し、実際に手にしてもらった。同時に、メンバーとなっている学生たちの多くが、中学校時代に学んだと考えられる現行の中学校教科書『新しい社会 歴史』(東京書籍)と、韓国の中学校で使用されている国史教科書の日本語訳版『入門韓国の歴史』(明石書店)も用意し、比較した。

(4) 検定合格後の状況

『新しい歴史教科書』検定合格(2001年4月)後の経過について確認した。①日本国内でも『新

しい歴史教科書』に対する批判があいつぎ、支持派と反対派の激しい論争が展開していること、②検定合格直後、韓国や中国が「憂慮」や「不満」を表明し、その後、具体的な修正要求が出され、③日本政府は、その修正要求に対して事実上「ゼロ回答」をしたことなどを、資料として配付した新聞記事を参照しながら解説した。

(5) 教科書の検定と採択

参考として、教科書の検定と採択の流れについてもふれた。まず、教科書検定の流れについて概説し、続いて、教科書採択の流れを、長野県を例に概説した。

3-3 いわゆる「教科書問題」をめぐる諸問題

「教科書問題」には、いくつもの問題が複雑にからみあっており、それゆえ論点は多岐にわたっている。そのいくつかを指摘し、多面的に問題を考えられるように配慮した。問題群を「日本国内」と「両国関係」に大別し、以下のような点にふれた。

(1) 日本国内の諸問題

①日本政府および日本社会の保守化（あるいは右傾化）。②これまでの教育とりわけ歴史教育に対する不満。③教科書検定そのものの問題。「検定は必要か?」「違憲ではないのか?」といった議論。④日本政府の外交能力。

(2) 両国関係の諸問題

①被害者と加害者という不幸な過去。②韓国は国定教科書。日本は検定教科書。③政府（国家）間の賠償と人間（個人）への補償。

3-4 両国の近現代史

(1) 近代の韓国と日本

配付した「日清日露戦争後の日朝関係年表」を参照しながら、①「脱亜論」と福澤諭吉、②伊藤博文と安重根、③関東大震災における「朝鮮人狩り」、④景福宮を分断した朝鮮総督府、⑤皇民化政策の諸相、⑥朝鮮神宮と靖国神社、⑦従軍慰安婦、といった近代における両国の関係史を考える上で重要な問題を確認した。

(2) 朝鮮半島の南北問題

朝鮮半島の南北問題を理解するために、戦後の朝鮮半島情勢と、最近の南北関係について、つぎのような点を確認した。

①1945年8月15日、「日帝」支配から解放されたが、②東西冷戦の激化により、北緯38度線を軍事境界線として米ソ両国が南北分割占領。③1948年、大韓民国（韓国）と朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）が建国され、④1950年、朝鮮戦争勃発。甚大な被害。⑤朝鮮戦争、日本へ影響。警

察予備隊設立。レッドパージ。「特需景気」による経済復興。⑥韓国のクーデターと軍事政権。⑦1980年代における韓国の民主化とソウルオリンピック。⑧北朝鮮の最高権力者金日成主席死去と息子金正日氏の権力継承。⑨南北の和解。金大中大統領の北朝鮮訪問と首脳会談。統一を目指す「南北共同宣言」。

3-5 近代以前の深く長い交流の歴史

(1) 近代以前の両国の交流

近現代史を確認したところで、これからの両国関係を考える時にも参照されるべき、日本と朝鮮半島の近代以前の交流史について、①国境線は近代の産物であり、朝鮮半島と日本列島に連続する文化要素が少なくないこと、②多様な文物が伝来しており、③大きな断絶は豊臣秀吉の朝鮮侵略のみであること、④近世の朝鮮通信使はたいへん厚遇されたこと、などを指摘した。

(2) 朝鮮と信濃の親密な関係

長野は古くから朝鮮半島と深い交流の歴史を有しており、それは今後、両校ひいては両国が友好関係を築いていく時に、大いに参照されるべきであると考え、次のような点にふれた。

①長野のシンボルである善光寺の本尊仏は、朝鮮でつくられた金銅仏であると推理できる。②古代にはシナノ系百済人が、百済とヤマト政権の交流を担っていた。③長野県内からは古代における半島との交流を証明する出土品が数多く発掘されており、④なかでも木島平村の根塚遺跡から発見された渦巻文装飾付鉄剣は、半島南部の伽耶製で、東アジアでも数少ない長大剣であることから、3世紀には、朝鮮半島の有力者が北信濃に移り住んでいたことを示す貴重な出土品で、半島と信濃の密接な関係を物語る。

これらの点から、長野（信濃）が、古くから朝鮮半島と独自の交流を重ねていたこと、その交流が当初、ヤマト政権を介さずに行なわれていたこと、すなわち、私たちの祖先は、国家（政府）の事情とは別に朝鮮と交流することができたという誇るべき事実を確認した。事前学習のまとめとして、両国政府間の緊張が高まっても、いにしへの祖先を見習って、長野発の友好関係を発展させるべきであることを、訪問団メンバーに伝えた。

4. 交流事業の実施

冒頭でも述べたように、今回の交流事業実施直前の日韓政治情勢は、歴史教科書や総理の靖国参拝などに端を発して緊張感を増していた。実際に、高校

レベルで訪韓を中止したところも続出していた中で、韓国国内でも有数の工科系教育研究機関であるという誇りと自信を感じさせる天安工業大学の毅然とした取り組みが今回の交流を可能にしたといえよう。

また、今回の交流では日韓の文化や生活の共通部分と大きく異なる部分、韓国人達の価値観の底流をなしてきたもの、そうしたものの近年の大きな変化等を短期の体験から学んでもらいたいという希望もあった。政府間の微妙な情勢の下で、当方の意図を十分に理解して本事業を有意義なものにするため、本校に非常勤でハングルを教えにみえている渋谷高子先生を日本側通訳としてお願いした。これが事業の成功に大きく貢献した。

限られた紙面と時間で交流事業の成果を報告し尽す事は至難の業である。ここでは基本的に訪韓中の時間的経過と実施項目を軸に、訪韓学生諸君の感想等も考慮しながら、実施された内容を報告する。

4-1 天安工業大学における交流

(1) 仁川（インチョン）国際空港から大学まで

訪韓初日7月28日（土）の韓国国内の天候は雨で、釜山上空通過後は雨雲の中ロール混じりの急降下を体験しつつ仁川空港へ降り立つ事となった。それまで韓国の玄関であった金浦国際空港ではハブ空港の機能を果たせないため、民間資本の参加を募って京畿湾に浮かぶ龍遊島の広大な干潟を埋め立てて建設され、今春開港したばかりの空港である。全施設が完成するとコンコルドが就航し、世界一日生活圈がうたい文句となる。

入国手続きを済ませ、一人10万ウォンを換金して送迎ロビーに到着すると、学事運営課長の黄義煥教授を筆頭に、梁教授、職員の方、学生諸君、通訳の鄭因恵さん等が待っておられた。

空港から大学までは貸し切りバスでの移動となった。開港後5年間は鉄道建設しないという出資者との契約のため、空港からの移動は高速道路のみであり、当然の事ながら高い。車窓から眺める里山と田圃は日本の風景と変わらないが、そうした中に突如として出現する高層マンション群は今の韓国を象徴している。それは人口の都市集中、核家族化、女性の社会進出、少子化、過熱する受験教育、農村の過疎化・・・と、未だ大きな問題になっていないのは環境問題位かと感じるほど日本に似ている。

途中のサービスエリアでミネラルウォーターを購入し、天安市内のレストランに到着すると、李鐘彦学長他学内行政機関の方々等が待っておられた。

歓迎セレモニーに続く夕食会は、和やかな雰囲気の中で行われ、「辛いけど美味しい」韓食を存分に味わう事ができた。日本を脱つ前の、万一の事態に対す

る我々の緊張感と不安を一掃するに十分であった。

(2) 寄宿舍での宿泊

初日の宿舎である天安工業大学の寄宿舍に到着し、部屋を割り当てて頂いた。男子学生の部屋を空けて頂いたようだ。扇風機が用意してあった。シャワーはこの時期水だが、我々の為に温水が出るよう配慮して下さった。また、集会室には地元名産の胡桃入りの菓子、桃、ネクタリン、ジュース等が食べきれぬほど用意されていた。慣れない旅で体調不良の者がでも対応できるよう、薬等も用意されていた。

寄宿舍玄関を入ってすぐのところにパソコンが用意されており、早速高専のホームページをのぞくと学生諸君がチャレンジした。キーはハングルでも似たようなものだというので、そのそばの公衆電話から国際電話をできるよう、白頭山をプリントしたICテレホンカードがプレゼントされ、学生諸君は早速家族や友人に電話をしていた。近くのコンビニエンスストアまで車で連れて行ってもらった者もいたようだ。



写真1 寄宿舍からネットワークで

(3) 歓迎式と学生交流会

訪韓2日目、テレビニュースで見る国際会議のような雰囲気の中で歓迎式が行われた。李学長の歓迎挨拶に続き、本校訪問団長がお礼の挨拶を行った。グローバル化の流れの中で、本日ここに集まった日韓の若人達が新朝鮮通信使として育ち、両国の発展に寄与して欲しいとの希望がその骨子であった。

記念品贈呈、天安工業大学側の大学概要説明、参加者の自己紹介と続いた後、今回の事業の主要テーマとしての学生交流会となった。

交流会では先ず天安工業大学側から、学生会長の全丞培君が学生会の組織や部活動、援農や孤児院訪問等のボランティア活動について説明した。長野高専側からは、学生会長の月岡洋子さんが、感謝の言葉に続いて「今回の交流を人対人の交流のきっかけにしたいと思っています。韓国の皆さんの生活の真

実を学んで帰れたら良いと思っています。」と挨拶した。長野高専の学生生活は、工嶺祭実行委員長の小宮山弘子さんが、4月からの年間行事の紹介を通じて行った。事前にOHPシートも用意しておいたが、そうした環境がなかったため臨機応変かつ的確に説明してくれた。



写真2 天安工業大学本館

交流会での質疑応答を以下に要約して示す。質問は日韓交互になされるスタイルで行われた。



写真3 歓迎式・交流会

天：学生の進路の状況は？

長：就職と4年制大学への編入に分かれる。不況で就職活動は困難さを増している。就職と編入学の割合は半々位である。

長：頂いた資料では貴大学は2年制だが、こうした大学は多いか？（日本では高専は4大に比べると数も少なく知名度が低い。）

天：短大が258、大学が247あり、校数も学生数もほぼ同じである。後期中等教育のところが日本と韓国では異なる。

天：一番人気の高い学科と就職率最高の学科は？

長：学科は5学科しかない。率1位は電子情報工学科。女子学生が他と比べて多いのは電子情報と環

境都市。就職については求人倍率1位が電子制御で、今年度は30倍。環境都市は建設不況の影響を大きくうけて10倍。

長：1年次72名、2年次50名の学科があるが、その差の22名はどうなったか？

天：韓国は徴兵制の為、その年齢に達すれば大半は兵役につくか大学で学ぶか選択する。そうした結果である。一部は家庭或いは本人の事情もある。

天：学生会長の選出方法は？学生会の一番の興味は？

長：会長、副会長、会計監査は全学生の投票で直接選挙する。学生会では学生がより楽しく学生生活を送れるように考えている。現在は秋の文化祭に向けて精力的に取り組んでいる。

長：長野高専では学生個々にメールアドレスを持っている。こちらではどうか？

天：大学内は完備されている。寄宿舎だけがまだなので学生達が完備に向けて闘争している。館長は今年中につけると約束している。

天：個々にメールアドレスをもっているのだからも交流を継続させていく事は可能か？

長：是非、交流を続けていけるようお願いしたい。

(4) 学内施設見学

天安工業大学の敷地は丘を利用しており、面積的にも景観的にもゆとりがある。大学は全部で16学科あるが(表3:天安工業大学学生現況参照)、全てを見学する時間的余裕が無かったため、最新設備と、こちらからの参加学生に関連した学科の設備を中心に見学させていただいた。

表3 天安工業大学学生現況(定員2,400名,現員2,041名)

学 科	1年	2年
機械工学科	79	50
電気工学科	76	49
コンピュータ工学科	77	64
ペーパー成型工学科	79	54
制御計測工学科	84	45
デジタル溶接学科	82	52
新素材熱工程学科	84	58
新素材応用化学科	80	67
工業デザイン科	36	47
電子工学科	84	60
建築工学科	75	52
土木工学科	79	41
自動車工学科	83	69
情報通信工学科	80	60
環境工学科	81	41
視覚情報デザイン科	41	30

工業デザイン、視覚情報デザインのみ定員40、他は定員80

最新設備の3D-CAD・CAM装置は、空調の効いた一室を与えられていた。その後で回った他の

実験室が、まとまった人数で同時に並行して実習しながら授業を進める思想で作られているのとは異なる関わり方になっている。

機器の陳腐化の速度は今や工業国ではどこも似たような状況にある。特に不況が深刻化している近年、教育現場では常に最新というわけにはいきにくい財政事情になってきているが、天安工業大学も例外ではなかった。

カリキュラム的にはかなり実習に時間を割いており、それをまとまった人数で効率的に行う設備の量が用意されているという感じを受けた。

4-2 韓国国内見学

(1) 韓国民族博物館

歓迎夕食会の折に、日本側通訳の渋谷先生を通じて、できるだけ韓国人達の普段着の生活の場、農村部、文化や生活の底にある日本との繋がり等を見て感じ取って帰りたいとお願いした。現在の両国政府間の状況、交流会を通して育みたい関係等を総合的に考慮し、前日の申し出にもかかわらず見学予定の一部変更に対応して頂けた。これが、見学中の学生間の交流には大きく貢献する結果となった。

博物館といっても建物の中に道具やジオラマが置いてあるスタイルではなく、李氏朝鮮時代からの役所や民家が当時の生活用具とともに忠実にしかもオープンな形で見学できるようになっている。

そうしたシチュエーションを最大に活かしたのは、韓国側通訳の鄭因恵さんであった。日韓双方の歴史・文化・風土・生活等に対する豊富な知識が見事に相互連携されており、一方通行の説明のみではなく、我々の多様な質問にも日本人が思わず頷く答えが返ってきた。

敷地北側小丘陵斜面に広がる雑木林は 20 年以上伐採されていない様子で、日本の農村と里山との関係が重なって見えた。農家の屋根の葺き方は日本とは異なるが、縁側に座ると昭和 30 年代の田舎に似た雰囲気包まれた。

(2) 景福宮

韓国の風水の思想では、崑崙山から白頭山そして北漢山、北岳山へと繋がる流れが都に命を与えるとみている。白頭山は中朝国境にあるが、韓国人達にとっては特別な山である事が頷ける。

数年前まで宮殿敷地内に建っていた朝鮮総督府として使われていた建物は撤去されていた。北漢山を北に望む本来の美しい景観が蘇ったといえよう。それはまた、新しい時代に向けての韓国の決意表明であるともみてとれる。

景福宮内では、時代劇のロケが行われており、人気ドラマという事もあって天安工大の学生達は写真

を撮ったりロケに見入ったりと盛り上がっていた。時代劇ではあるが女性の活躍を描いており、女性進出が著しい今の韓国の世相と重複して、絶大の人気を誇っているのだそうである。

(3) 統一展望台

ソウル市内から漢江沿を北上していくと、車の数が減ってくる。川岸に有刺鉄線が張られ、サーチライトと歩哨所が所々に見られるようになると、韓国の置かれてきた状況を実感できる。近年は、金大中大統領の太陽政策が進められているとはいえ、東西ドイツ程一挙には進まない事情があるようだ。

鰲頭山統一展望台の足下で、北東から流下してくる臨津江が南から流れてくる漢江に合流し、大きく西に流れを変えて京畿湾に流れて行く。流れはゆったりとしており、合流部には浅瀬も広がっている。「イムジン川」の歌のとおり、水鳥が飛んでいた。生憎の天候で臨津江の向こうは雲が厚く低く西に流れており、遥か遠くまでは見る事ができなかった。

韓国の学生に聞くと、ここへはこれまでに一度くらいしか来た事が無いそうである。

(4) 南大門市場

南大門は、ソウル市がニュースに登場するときは必ずといって良いほど映る象徴的な建造物である。南大門市場はその南大門の東側に隣接した南倉洞に展開した一大問屋街で、ソウル市民はもとより日本から買い付けに来る客も多い。上野のアメ横をより韓国風にした様な感じだが、やたら大声を出して呼び込んでいる風は無い。豚の頭から、朝鮮人参、イブニングドレスに至るまで売っている。交渉能力があってまとめ買いできれば相当に安くなるようだ。



写真4 ソウルの象徴南大門を背に

限られた時間での団体行動ではあったが、日韓の学生達の中には果敢にチャレンジするものもいた。値段を聞けば安い、サイズが合わねば土産にはならず、デジカメに入れてきただけのものも多い。こ

こでも通訳の鄭さんは、それらの品が韓国の生活文化の中でどう利用されているかてきぱき説明を加えた。急ぎながらではあるが主要部分をぐるりと回り、あちらの店こちらの路地でエネルギーに商売するキムチパワーを十分に感じとる事ができた。

(5) 戦争記念館

戦争記念館のエントランスは、朝鮮戦争で命を落とされた韓国人達と連合軍の兵士達の墓碑からなっている。記念館の敷地は広く、各展示室を見て歩くだけでも時間と体力が要求される。

ここには朝鮮戦争当時の映像や武器、各部隊の兵装やジオラマが大量に展示されている。映像からも展示品からも「忘れない」意思が伝わってくる。李承晩の署名入りの表彰状や戦場に赴く学徒の襷の文字は、この50年間で急速に文章表現の変革をなしとげた韓国の思い切りと行動力を感じさせる。今の韓国の若者は漢字を読まない。

見学順路も終盤になると地雷から最新の空対空ミサイルや、高速被甲弾などのハイテク兵器も展示されており、更に屋外にはB52やフル装備のF4ファントムまで展示されている。両親あるいは祖父母と来館した子供達が、実際に銃座に座って操作する事ができるようになっており、子供の頃から見たり触れたりできる環境にある。

(6) 韓国の食事

韓国訪問中に何度か韓食を口にできる機会を得た。辛いものが苦手な学生の中には、パンが食べたくなくなってしまった者もいたが、大半は辛いけれども美味しいという感想であった。それはダシの旨味がベースにある辛さ故であろう。

味の側面以外では、核家族・少子化の中で育った者は若干の違和感を感じるであろう食習慣もあったが、気にせず食す事ができれば和気藹々となれる。



写真5 李学長と日韓学生達

2日目昼の韓食では、箸や器から食材一つ一つに

至るまで韓国の風土と共に生きてきた知恵がどのように生かされているかを、食べながら学ぶことができ、実に有意義であった。韓国の生活文化に対する誇りと、それを日本の若者達に伝えたいという熱意が伝わってきた。高度経済成長—核家族化—食の欧米化という流れの中で日本の食卓が捨ててきてしまったものがここでは生きていた。

5. 交流事業の成果

4日間の交流事業を通じて得たもの、得つつあるものは多様である。個人としてのもの、組織間のものなどそれぞれが異なる。ここでは一般の観光旅行とは一味違う、日韓学生の車座トーク、日本へ帰ってからも続いているメールによるやりとりの中から、少しずつ現れ始めている成果を紹介する。

(1) 参加学生の感想文から

学生達は、天安工業大学内の施設見学の途中辺りから、互いにカタコトの英語を媒介としてコミュニケーションをとるようになった。その後の民族村では、日本にあるものや風習のルーツや共通点、差異などでまたお互いに説明し合い、急速に交流を深めていった。宿舎に着くと一部屋に集まり、互いの学生生活や興味の対象等について語り合い、盛り上がったようだ。そして3日目、戦争の話題になった。

韓国では先述のように兵役の義務があるため、一旦兵役を務めて大学に復帰するものも多い。学生会長の全君も兵役を済ませて復帰しており、そうした学生達は25歳~26歳に達している。日本の学生達も彼等からは背筋の通った礼儀正しさ・凛々しさ・リーダーシップ等を感じ取っている。以下に、学生が書いた感想文の一部をそのまま紹介する。

『首にかけているネームプレートに話が及ぶと、彼らの中の一人がそのプレートに口を縦にはさみ、あごと頭を両手で挟み、押しつぶすような動作をした。私たちは何の事か全く分からずアホ面丸出ししていると、彼らは韓国語、英語、日本語を混ぜながら一生懸命説明してくれた。その部屋に集まった長野高専の学生全ての知能を集結した結果、みんなの言いたい事は(恐らく)次のような事だということになった。「兵隊は自分が死ぬ事が分かると、最期の力をふりしぼってネームプレートを前歯にくい込ませる。そうしないと肉体が朽ち果てたとき、だれの骨か分からなくなってしまうからだ。」苦勞して会話が通じたという事に感動した反面、戦争は、韓国の学生達にとって身近なものだ、ということにショックを受けた。軍隊での仕事の大半は飛行機や設備のメンテナンスだといったが、命令次第では戦場

に行くこともある。一生離れ離れになってしまう恋人たちもいる。戦争の恐ろしさも、厳しさも何も知らずにのほほんと生きている自分達が少し恥ずかしくなった。何も知らない子供達が、同じ過ちを繰り返さないと言えるだろうか。日本は平和教育の国とはいえ、平和にしがみついても何も見えないフリをしているような気がした。戦争記念館を見学した後だったせいもあり、日本は<戦争>、<平和で豊かなこと>の意味について考え直す時期なんじゃないかと私の心はモヤモヤしていた。』

新しい時代に相応しい交流と貢献の有り方が求められている。

(2) メールが開く日韓新時代

ホテルの部屋で、言葉の大半は分からぬままKBS等のニュースを見ていると、各地の水害のニュースに混じって「小泉総理」「閣僚参拝」「靖国神社境内の大日本帝国軍人姿の一团」が、毎回セットで映し出される。一方、日本のBSの番組も、当然の事ながら日本語でそのまま見る事ができる。同じホテルの別の一室では同時刻日韓の学生達がぎゅうぎゅう詰めになって、徹夜トークをしていた。今でもメディアの持つ力の大きさや役割は変わらないが、いつの時代も何処の国でも、学生達は自分達の感性で嘘と誠を見極めようとするものなのだろう。そして彼等はお互いのメールアドレスを交換し、「これからが始まりなのだ」と約束した。

日本に帰って一週間程たって、何人かにメールが届いた。「交流会が楽しかった。忘れられない。早くまた会いたい。」そんな内容のものが多い中、「今までの日本に対する考え方を改めてみようと思う。」という男子学生のものがあった。

正直なところ筆者ら教官は一步遅れをとってしまった感を否めないが、こうした学生達の交流を支援する方法は幾通りもあろう。芽が出始めた今を逃すと、また一からになってしまう。学校としてこうした学生達の自主的かつ継続的な取り組みへ支援の手を差し伸べる事は、国際化時代の教育実践として大きな意義を認められる。交流事業に携わった者としてできる事から支援していこうと考えている。

6. まとめ

日韓両国の政府間に極度な緊張がある状況下で、本校と韓国天安工業大学との第4回交流事業が、きわめて友好的に実施され、大きな成果を得たことを報告した。

事前学習を強化した背景には、不穏な両国間の事態を深刻に受け止めた事実があったが、結果的には両校の学術交流事業にとっては杞憂に過ぎなかった。しかし、その準備期間での活動が、訪問団の構成員にとって韓国の理解に大いに役立ったことはいまでもない。

学生たちは、筆者らの予想を超えた交流活動をしてくれた。これらは、学生個人の大きな糧となることはもちろんであるが、両校の太い絆になる点でも異論の無いところであろう。今回の成果を、さらに次回への交流事業に生かしていくことが必要である。

今回の交流事業実施を省みて、改めて天安工業大学の学長はじめ教職員の皆様と学生諸君に深謝申し上げる。通訳のみならず韓国事情の全体に渡って指導いただいた渋谷高子先生にも感謝の意を表すものである。また、計画推進に当たっては、浅黄谷前校長、城所事務部長をはじめとする運営会議のメンバーに的確なご示唆をいただいた。着任早々の鈴木校長には、訪韓決断に当たって寛容で明確なご指示を賜った。さらに、天安工業大学との事務的な折衝には寺島教務係長のご尽力が心強かった。あわせて感謝申し上げる次第である。

最後に、この事業の実施に当たっては、本校後援会及び本校同窓会から物心両面でのご援助を賜った。心から御礼を申し上げて、報告を閉じさせていただきます。

参 考 文 献

- 1)山本行雄他:天安工業専門大学との国際交流報告:長野工業高等専門学校紀要第31号(1997.12) pp.197-204
- 2)天安工業大学:学校要覧2001(2001.5)